



# 第二中学校だより

令和5年10月号

↓二中新ホームページ↓



「明るい挨拶 光る汗 きれいな学校 きれいな心」

## 「死ね」の向こう側

校長 小関 直

校長室の前の廊下は、学校の中でも比較的静かな空間である。教室はなく、特別教室もない。教室と職員室の経路からも外れ、昼間は教職員さえあまり通らない。

賑やかなのは、体育館への移動と登下校の時くらい。教員の存在があまり感じられない空間なので、その時だけは、子供同士の屈託のない会話がよく聞こえてくる。特に、感情を表す短い言葉、マジ、クソ、ヤベ、ザケンナ、バカ、死ね、はよく聞こえる。

社会性の獲得は、親よりも友達の方がはるかに強く影響しており、教員はその1割にも満たないとされる。友達とのコミュニケーションの中で様々な社会性は育まれるが、こうした言葉もそうした関わりの中で獲得される。同時に、多少の悪に触れることで免疫を獲得し、耐性も身につけていく。それは、30年前も今もあまり変わらない。

変わったのは、言葉選びの基準である。喜怒哀楽を表す「感情語」は、時代で言い方は変化するものの、感情豊かに使われ続けている。一方、人権を否定するような言葉、バカ、死ね、消えろの類は、これまでは特定の子供しか使わなかった。人権を否定し、人を傷つける言葉を平気で発することができるのは、自己肯定感の低さに起因することが少なくない。家庭で、子供が、バカ、死ね、という言葉が発したら、親は誰でも烈火のごとく叱るのが通例であった。世界で一番かわいい我が子がそんな言葉を使って人を傷つけてほしくないからである。深い愛情があるからこそ通じるマイメッセージである。そうした親子関係の在り方が、言葉選びの基準となり人権感覚の土台となってきた。いわゆる躰である。

他方、子育ては多様化しており、叱るだけが正解ではないと考える保護者は多い。私もそうした子育てには賛成である。子供の特性に応じた個別

最適な子育てにより、社会性を育てている好事例も多い。ただ、問題なのは、中学生の発達段階において、「死ね」を無自覚に言ってしまうという事実である。以前は、虐待や過保護・過干渉など、極端に偏った親子関係の中で自己肯定感が感じられずに言ってしまう場合が多かったが、現在は、そうとも限らない。コロナ禍で希薄となったコミュニケーション、子育ての多様化で時機を逸した曖昧な発達の結果が遠因になっているとも考えられる。教員が指導すると「そんなつもりはなかった」と、いけないことであることをはじめて理解する子供が多くなった。中には、多くの証言があるにもかかわらず、「言っていない」と事実すら否定する子供もいる。自己肯定感の低さ、思考のエラーは、人権感覚育成以前の課題である。

人権感覚の差は、いじめ問題の根深さに直結する。「死ね」と言われた子供がひどく傷つき、言った子供が無自覚に面白半分で言ったのなら、事は重大である。これまでも、言われた子供が怖くて反論できず、言った子供がその様子を見て支配的な関係を結んだ例は幾多も発生している。金品の要求や犯罪行為の強要などにエスカレートすれば、「いじめの重大事態」である。行きつく果ては、報道のとおりである。誰もが不幸にしかならない。

子供同士のコミュニケーション環境を整え、人権感覚を育むのはやはり大人の責務である。保護者と学校が協力して取り組む必要がある。引き続きのパートナーシップを！

コロナ禍後、「敏感すぎる自分の処方箋」が見つけられず、悩む子供が増えた。不要な励ましは悩みを深めるが、悩みへの寄り添いは勇気となる。勇気が湧いてきた子供にアドバイスを求められた時、私はいつも「下を向いていたら虹を見つけることはできないよ」ということにしている。喜劇王・チャップリンの言葉である。